二十一世紀への人間と哲学

新しい人間像を求めて

下

池田大作

SEARCH FOR A NEW HUMANITY

J・デルボラフ

二十一世紀への人間と哲学

新しい人間像を求めて

下

池田大作

SEARCH FOR A NEW HUMANITY

J・デルボラフ

河出書房新社

Auf der Suche nach einer neuen Humanität
by
Daisaku Ikeda and Josef Derbolav
German edition © Nymphenburger, München 1988

池田大作（いけだ だいさく）
一九二八年一月二日、東京生まれ。創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル（SGI）会長。国連平和賞受賞。桂冠詩人の称号。著書に『人間革命』（現一〇巻）、『二十一世紀への対話』（A・トインビーとの対話）、『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』（H・A・キッシンジャーとの対話）、『私の人間学』など多数。

ヨーゼフ・デルボラフ（Josef Derbolav）
一九一二年、ウィーン生まれ。ウィーン大学でドイツ語学・文学、古典文献学、哲学、教育学、心理学を修め、一九五五年、ボン大学の哲学および教育学の正教授となる。西ドイツ教育学界では、教育哲学の中心的存在であった。アメリカ、ソ連、日本でも客員教授をつとめ、著書、論文多数。一九八七年没。

二十一世紀への人間と哲学 下
池田大作／J・デルボラフ
一九八九年四月二五日　初版発行
一九八九年五月十六日　再版発行
河出書房新社
発行者　清水　勝
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
TEL（四〇四）一二〇一（営業）
（四〇四）八六一一（編集）
振替（東京）〇―一〇八〇二
印刷　三松堂印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
装幀　渋川育由
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります
©1989 Printed in Japan
ISBN4-309-23009-1

目次

第五章　仏教とキリスト教（つづき）　7
4　法か人格神か　7
5　ドイツ人と仏教研究　41
6　仏教とキリスト教の交流　58

第六章　教育問題　67
1　何が最も大切か　67
2　教育と政治権力　84
3　登校拒否の原因　100
4　校内暴力の風潮　110
5　青少年の非行　120
6　童話と性格形成　131

第七章　未来のための現在　145
1　環境破壊に対して——略奪される地球　145
2　さまざまな汚染物質　158
3　危険な火遊び　179
4　文化遺産の保存　192
5　生命工学の課題　203

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

上巻目次

序　文

第一章　日独両国の歴史的関係

1　日独両国の共通点　2　勤労の倫理　3　教育と学問　4　ドイツ帝国と日本　5　ワイマール体制の崩壊　6　分割と統一

第二章　伝統的生活の近代化

1　近代化への反動　2　日本は何をなすべきか　3　自然の保護　4　家族制度の崩壊　5　地域共同体の復興　6　「ストレス」への対処

第三章　西洋と東洋のヒューマニズム

1　西欧ヒューマニズムの背景　2　知性重視と生命尊重　3　ヒューマニズムの本質と形態　4　人間の善悪両面性

5　生命世界の調和　6　「人間らしさ」の条件

第四章　倫理と宗教の役割

1　倫理規範の源流　2　倫理的行動の基盤　3　情念の抑圧と昇華　4　子供の教育　5　倫理と政治家　6　医師と倫理性

第五章　仏教とキリスト教

1　仏教とキリスト教の共通点　2　愛と慈悲　3　仏教はキリスト教に影響を与えたか

二十一世紀への人間と哲学（下）

第五章　仏教とキリスト教（つづき）

4　法か人格神か

池田　仏教とキリスト教の相違点の中でも、最も根本的な問題は、仏教が〝法〟を究極にあるものとしているのに対し、キリスト教は〝人格神〟を究極の存在としていることであると私は考えます。

もちろん、キリスト教においても、カトリックとプロテスタント、さらにはギリシャ正教とでは大きな違いがありますし、さらに、それぞれの中に、さまざまな流派があって、それぞれ

に教義内容も違うでしょう。しかし、一応、バイブルが共通の原点であるかぎり、天地万物を創造した唯一神が、全キリスト教徒にとっての一切の根源であり、この神はまた、激しい愛憎の感情をもった人格的存在でもあります。その点では、各派の違いは、ほとんどないといえるでしょう。

これに対し、仏教では、実際にこの世界にあらわれた釈迦牟尼仏だけでなく、経典の中には、過去・現在・未来にわたり、また広大な宇宙の中のたくさんの世界を舞台に、数えきれないほどの多くの仏陀が存在しているとされます。本来〝仏陀〟とは「真理を悟った人」を意味し、真理は時間・空間を超えた普遍的なものですから、時空のあらゆる広がりの中に、それを悟った仏陀は無数に存在しうるのです。のみならず、今は悟りを得ていない人々も、修行し、思索を深めることによって、仏陀になる可能性をもっています。

「真理を悟った人」が仏陀であるということは、「真理」こそ、あらゆる仏陀を生ぜしめる根源であるということでもあります。ゆえに、仏教では、この「真理」すなわち〝法〟こそ、あらゆる仏陀の親であり、師であり、主君であると説くのです。

そして、現実に生きている人々の幸・不幸を決定していくのは、人々がこの〝法〟に合致した行動をとるか、そこから外れ、背いた生き方をするかであるとされます。

仏法でいう〝法〟とは、人間が社会的に制定する〝法〟ではなく、自然界のあらゆる事象が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

則っている法則性のようなものです。したがってたとえば、引力の法則を知り、それに合致した行動をとればケガをしたり命を落とさないですむのに、それを弁えないで、五十センチの高さから飛びおりるようなつもりで五十メートルの高さから飛べば、即死は免れません。それと同じように、そして、もっと深いところで、人間の生命活動を左右する〝法〟が働いており、それに合致した行動をとるかどうかが、人々の幸・不幸を決定する根本であるというのが、仏教の明かしている問題です。また、この幸・不幸は、たんに現在の人生の中での、物質的・社会的な幸・不幸だけではなく、死後においてもつづいていく幸・不幸です。

私は、意思や感情、また知性をもった人格神が人々の運命、幸・不幸を支配しているとするキリスト教的考え方は、高度な抽象的思考のできない人々を教化するのには説得の即効性をもっていたでしょうが、抽象的思考もできるようになった人々にとっては、不満足であるばかりでなく、かえって、さまざまな疑問を生ぜしめるのみであろうと思います。たとえば、現実の社会では、善人よりも悪人のほうが神によって守られているように見える場合が少なくありませんから、神の公平さも、さらには神の英知さえも信じがたくなることもあるわけです。

今日、キリスト教を信仰する人々の中にも、究極の存在を人格的な神とするよりも〝法〟に近い概念で捉えようとする傾向があると聞きますが、教授は、この問題について、どのように考えておられるでしょうか。

デルボラフ　事実、キリスト教に対するありとあらゆる異論は、かれこれ二千年に及ぶキリスト教神学と教会の歴史の中で徹底して考え尽くされてきていますし、頻繁に、激しい対立抗争の原因となってきました。人格神の理念に対する擬人論批判も、その一つです。

そこで、私としてはこうした一連の批判、反省点の核心だけを取り出し、ここでの中心テーマを三段階に分けて考えてみたいと思います。

最初に、表面的にですが、あなたの論点に対するキリスト教の擁護を試みてみましょう。ただし、キリスト教圏内でも、人格神という観念に対しては批判的啓蒙がなされ、この観念がかなり稀薄になっていることは否めません。したがって、これに関連して、宗教と哲学、さらに個別科学との関係を考慮する必要があります。同時に、この関係が東洋ではどう解釈されるのか、お尋ねしたいと思います。

第二の思考過程では、キリスト教的意味での「人間と神の取引」としての救済史と、仏教的理解における「輪廻転生」を対比させたいと思います。そうすることにより、あなたの言われているキリスト教と仏教の差異の問題を、深く考察できます。

最後に、第三の思考過程で明示すべき問題は、キリスト教の伝統的教義が信仰者自身にとってどのような点で理解しがたく、疑念の対象となるのか、また、はたして信仰者はこうした困

難をどのようにして乗り越えることができるのか、ということです。

この三つの思考過程は、キリスト教と仏教の比較の範疇にあり、あなたの異議に対して答えを出すことになるはずです。

あなた自身が思っておられるように、仏教がキリスト教よりもすぐれているということはすでにニーチェが、彼の著書である『反キリスト者』の中で明瞭に言い切っています。彼は、まず、両者を共に「虚無主義的」で、退廃的な宗教である、と特徴づけています――このことは、両宗教が貧しい人、弱者に最大の関心を払っているという事実を裏づけているとし、その後で一気に、仏教はキリスト教よりも「百倍も現実的」である、と言っています。というのは、仏教は「客観的で冷静な問題設定の仕方を身につけており」、また、「〝神〟という概念をすでに片付けている。それは仏教が何百年間にもわたる哲学的運動の後に」やってきたからだ。したがって、仏教は罪にではなく、苦悩に対して戦うのであり、すでに「善悪の彼岸」に立っているのである、と。

ニーチェがこの最後の二点と虚無主義説において正しい見方をしたかどうかは、ここでは問わないことにします。いずれにせよ、彼は仏教を精神的に成熟した男性的宗教として性格づけており、ここに、キリスト教と対比した場合の、もう一つ別の相違点に触れているわけです。キリスト教的信仰理解というのは、疑いもなく、子供っぽい性格をもっています。人間は自分

を「神の子供」と理解し、信仰上の自己実現においても、再び子供のようになることを理想としています。イエスは「子供たちが自分のもとに来るよう」に呼びかけ、その一人でも侮辱したり、危害を加える者には最も厳格な罰を与えると嚇すのです。そこで、イエスは人々に対し福音を告げる時も子供に接するような態度をとります。すなわち、神話的に、神なる父を思い浮かべ、その子としての自らのあり方と救済の使命について語ることになります。もっともこの種の言い回しは仏教でも珍しくありません。宇宙の法についても、あなたが述べられたように、法が父であり、師であり、主君であるとするのは、そうした人格的観点から考えることによって初めて、そこに温かさが生まれるからです。

池田　仏教は究極に存在するものを〝法〟としますが、それを覚知した〝仏陀〟は人々に対し主・師・親の三徳をそなえているとします。すなわち、仏陀はただ〝師〟として人々に〝法〟を教え示すだけでなく、〝主〟として人々を守り、また、〝親〟として慈愛します。仏教においては〝法〟は仏陀がつくり定めて人々に押しつけたものではなく、本来、仏陀より先行して存在しているのです。

したがって、その〝法〟を人々に示す仏陀は、いわば〝法〟と〝人々〟との仲介者という立場になります。もし、仏陀が〝法〟をつくったのであるとすれば、この関係は逆転し、〝法〟

が仏陀と人々との仲介物になるでしょう。

ところで〝法〟はそれ自体では語りませんから、人々が〝法〟を知るためには、それを仲介する人を必要とします。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教において、預言者が重要な役割を占めているのは、このためであると私は考えます。その預言者の特権的地位は、教皇やカリフに受け継がれ、これらが人々に対して絶対的ともいえる権威を保持することになったわけです。

仏教では仏陀が仲介者であり〝法〟が究極にあるものですから、人々は仏陀の教えに従って学び修行することによって、〝法〟を悟れば、同じく仏陀になることができます。それに対して、一神教の宗教では、究極に存在するのは人格的な神であり、この絶対神の意志がすべてを支配しているとされます。仏教でも人々を子として見ますが、それは、やがて、大人になるべき存在としてであるのに対し、一神教が人々を見るのは、永久に神に従い、神に慈しまれる子でありつづける存在としてです。

デルボラフ　カトリック信仰史を見ると、献身的信仰から生まれる空想が神話的想像世界をより具体化し、補完するということが、しばしば起こっています。比較的近い過去から例を引いてみましょう。聖書の聖母マリアの記述を基に、マリア信仰（この場合、マリアは「第二のエバ」と呼ばれます）が生まれましたが、マリア信仰では、ポーランドだけではなく、さらには

ヨーロッパ以外の多くの国々でも根強い伝統になってきています。こうした聖母マリア崇拝者は、父なる神とその子イエスは天に君臨し、神なる母は地上的死を甘んじて受け、他の人間と運命を分かち合うという教説に不満をいだいてきました。多教のキリスト教徒のこうした想いに応じて、教会は一九五一年に「聖母マリアの昇天」を教義化し、天上界に「聖家族」を統一したのです。

他方、このように次々と泉のように湧き出てくる空想に対して反動的な動きを見せたのが、信仰啓蒙主義です。彼らは、そのようなイメージはかりそめの幻にほかならないとして、信仰の本質を浮き彫りにすべく、「非神話化」に努力しています。よく引き合いに出されるルドルフ・ブルトマン（注・ドイツの新約聖書学者。一九二一～一九五一年マールブルク大学教授。ナチのユダヤ人政策を批判して教会闘争に参加。一九四一年『新約聖書と神話論』で新約聖書の非神話化を主張。第二次大戦後、プロテスタントとカトリックの神学、哲学、宗教学、また日本の仏教非神話化にまで及ぶ影響を与えた。一八八四～一九七六）の非神話化キャンペーンは、哲学的あるいは個別科学的な信仰啓蒙主義によって、何百年も前からなされてきたことです。

このキリスト教信仰啓蒙主義には、神秘的側面と同時に合理的側面が示されています。たとえば、初期プロテスタントの地域では、神智学的サークルが形成されましたが、そこでは、受肉、十字架上の死、救済という神的プロセスを、歴史的事実性を考慮しつつ、個人の霊的生活

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.